

トマス・マロリー「アーサー王の死」における  
二重属格構造について

神 田 み な み

## 1. はじめに

OED(*of*, 49)によると、*of*構造が人の所有・所属関係を示す意味で使われ始めたのは、13世紀以降である。現代英語では、以下の構文に相当するものである。

- 1) a friend of mine
- 2) the silence of him

上の例文1)のように*of*構造が属格を含む場合がある。所有等の意味関係は前置詞*of*で既に示されているのに重ねて属格を用いるこの用法を、二重属格(double genitive) (または後置属格(post-genitive)、冗長属格(pleonastic genitive))という。上記の2例の構文を区別して、本稿においては、1)を二重属格、2)を*of*+与格構造と呼ぶこととする。

本稿では、まずその起源に対する諸説を調べ、現代英語における二重属格の特徴を検討した上で、15世紀の代表的散文トマス・マロリー「アーサー王の死」における二重属格の使用状況を検討し、現代英語における用法と比較する。

## 1. 二重属格の起源

古英語において、所有はもっぱら属格によって示された。*of*構造が所有を意味する用法は後期古英語に見出される。二重属格構造をうみだした前置詞*of*の意味・用法については、大きく分けて、部分説と同格説とがある。

OED(*of*, 44) は*of*+所有格(属格)、つまり a friend of mine の用法の起源を以下のように説明している。

Originally partitive, but subseq. used instead of the simple possessive (of the possessor or author) where this would be awkward or ambiguous, or as equivalent to an appositive phrase; e.g. *this son of mine* = *this my son*; *a dog of John's* = a dog which is John's, a dog belonging to John.  
(All the early examples, and many of the later, are capable of explanation as partitive.)

このように、二重属格は、もともとは部分的(partitive) 意味を持っていたという説の代表として、Mätzner(Ⅲ, 222)をあげたい。彼によれば、前置詞*of*は「・・・の一部分(中)から」('out of the number of')を示し、*of*+属格は先行する名詞の複数形を省略したものであり、*a book of his* は 'a book of (from out the number of) his books' が元来の構造であるという。しかし、主要語となる名詞は数多く(少なくとも、文中の名詞が示す数よりも多く)あることが最低条件となるが、*that nose of his* というように単一の所有物を表したり、*that courage of his* のように主要部が不可算名詞であったりする場合は、部分属格の用法とみることは不可能である。こうした矛盾した例に対しては、

Mätzner は、部分的特質が時が経つにつれて次第に失せていったからだとする。しかし、部分的意味を持たない二重属格構造は、中英語に数多く存在し、完全に無視できるものではないであろう。

Jespersen (1927) は *A Modern English Grammar* (Ⅲ, 1.5) で、「部分」説に反対する。部分的意味をはっきり示す *one of my friends* が *a friend of mine* に対して存在するというのである。前者は明らかに他に複数の「私の友人達」がいることを前提とするが、後者にはその前提は必要ではなく「私の友人」が一人でも複数でもよい。つまり、二重属格は、それが示す名詞が複数あることを全く前提としないのであるから、「・・・の一部(中)から」ととる「部分」説は意味をなさないとする。

Jespersen は、「部分」説に対して同格(*appositional*)説を唱える。彼によれば、前置詞 *of* は意味上相等しい二つの単語を繋げる機能があり、しいて意味をあげれば「・・・である〜」('who is,' 'which is')となる。この前置詞 *of* の機能は、*the three of us*, *the City of Rome* に見られる。「同格」説であれば、*that nose of his* = 'that nose which is his' も *a friend of mine* = 'a friend who is mine (my friend)' 同様説明がつく。

Kellner (1890) も、Jespersen と同様に、二重属格は、前置詞 *of* が「部分」を示す構文から派生したとする考えには無理があるとする。それに合致しない *that nose of his* のような文が中英語にも多く見られる点を彼も重視している。

Kellner は、二重属格の発生には必要性があったとする。つまり、古英語においては、所有代名詞は純粋に所有・所属を意味する形容詞であったのが、中英語(現代英語も同じく)では、決定的意味 (*determinative meaning*) を持つようになった。所有代名詞は、古英語では定冠詞と共起し得たが、中英語では定冠詞は余分になり、また、不定冠詞と共起するのは不可能となった。彼によると、二重属格は、「所有」と「不定」の概念を同時に示すのに不可欠な構造として登場したということになる。名詞の「不定」の概念は前置の不定冠詞で、「所有」の概念は後置の *of* 構造で示される。しかし、なぜ、与格ではなく属格を用いる二重属格構造となるのかの Kellner の説明は明確ではない。

所有代名詞や名詞の属格が「定」の概念を示すため、「不定」名詞の場合、*of* 構造が用いられることは Altenberg (1982:27-31) も指摘している。ほぼ同等の意味で使われる名詞の属格と *of* 構造ではあるが、17世紀に入ると、

- (a) non-definite phrases: *a house of my uncle's*.
- (b) partitive constructions: *a grain of mustard seed*.
- (c) expressions denoting material: *a crown of gold*.
- (d) expressions denoting place of origin: *Jesus of Nazareth*.
- (e) expressions denoting quality: *debates of importance*.
- (f) expressions denoting geographical appositions: *the river of Jordane*.

以上の表現においては、*of* 構造のみが使用される。これらの表現を名詞の属格を用いて言い換えることはできない。上の(a)は、二重属格である。

ここで、Keilner が文献に現れる時期の順によって二重属格構造を3分類していることに注目したい。

I. *a (any, every, no, etc.) friend of mine*  
—不定冠詞とof+所有代名詞を含む。

II. *a knyght of king Arthur's*  
—不定冠詞とof+名詞の属格を含む

III. *that nose of his*  
—指示代名詞とof+所有代名詞を含む。

または、例外的に、

*the knyght of king Arthur's*  
—一定冠詞とof+名詞の属格を含む

上の分類のうち、IとIIは、Chaucer の作品で既に14世紀には見られることは、Keilner とJespersen によって指摘されている。Van der Gaaf (1926) によると(ただし、この論文は手に入らなかったため、Hatcher (1950)の引用を参考とした)、IとIIは1300年頃、IIIは1350年頃の文献に確認されるという。

Keilner によれば、もともと、不定の概念を示す必要性から発達した二重属格構造であるのだから、IIIの構文が後から現れるのは当然のことであるとする。

## 2. 現代英語における二重属格の統語的・意味的特徴

現代英語においても、二重属格は「不定」の概念を表す。それは、名詞の属格や所有代名詞の機能との比較によって明確に示される。Quirk et al. (1985:327f) も指摘するように、名詞の属格または所有代名詞は、定(definite)を示す決定詞的(determinative) 機能を有するもので、不定(indefinite)を示すには、of+与格構造または二重属格構造が用いられる。

(i) *Susan's son* → *a son of Susan, a son of Susan's*

(ii) *her son* → *a son of hers*

また、*a son of Susan*のような二重属格用法においては、その名詞句の主要語(head)は基本的に不定(indefinite)でなければならないとQuirk et al. は言う。

Of+与格構造と二重属格を比較して、両者には明らかに、意味的・統語的相違があることを、McCawley(1988:389)は指摘している。

A) Let me tell you about a strange problem of mine.

B) I hope I never see that ugly face of Sam's again.

上記の例文の属格を対格に換えること(\*a strange problem of me, \*that ugly face of Sam)はできない。また、

C) Several paintings of John's have just been stolen.

においては、*paintings of John* にすると意味がはっきり変わってしまう。彼によると、*paintings of John's* は John が所有する絵画や John が描いた絵画 ("paintings that John owns" or "paintings painted by John") を意味するのに対して、*paintings of John* は John を描いた絵画 ("paintings depicting John") にしかなりえず、その意味は二重属格用法にはない。つまり、この場合、二重属格構造は前置属格名詞とほぼ同じ意味であり、前置属格名詞 *John's paintings* は John が所有する例の絵画 ("the paintings that John owns")、John が描いた例の絵画 ("the paintings painted by John") や、John が手入れすることになっている例の絵画 ("the paintings that John has the task of cleaning") といったより広い意味を有し、二重属格同様、John を描いた例の絵画 ("the paintings depicting John") にはなりえない。したがって、二重属格と前置属格名詞とでは、主要語と修飾語の意味的關係は等しいことになる。

上記の観察に対しての Altenberg (1982:70-72) の説明はさらに明快である。二重属格の存在理由 (raison d'être) として、これが、主に主格関係 ('subjective' relation) を示す有生 (animate) 名詞とともに用いられ、その属格名詞は動作主 (agent)、所有者 (possessor)、または経験者 (experiencer) を表すことを上げている。それに対して、後置される *of*+ 与格構造は通例目的格関係 ('objective' relation) を示し、対象 (object) や着点 (goal) である無生 (inanimate) 名詞が用いられる。従って、不定 (non-definite) を示す場合に *of*+ 与格構造が属格名詞の代わりに使用されると、その名詞が目的格 ('objective') ととられる恐れがある。そういう場合、主格を示すことをはっきりさせるために、*of* 構造に重ねて属格が用いられる。つまり、二重属格は明確に主格関係を示すというのが Altenberg の考えである。

Jespersen も、*A Modern English Grammar* (Ⅲ, 1.5.9) で、二重属格構造が「主格属格」を、*of*+ 与格構造が「目的格属格」を示すという意味上の違いを指摘している。例えば、"an impartial estimate of his" では、"estimate" が "his" で示された男によってなされたことになるが、"an impartial estimate of him" では他の誰かが "him" で示された男に対して行った "estimate" ということになる。同様に、*a friend of Tom's* と *a friend of Tom* (但し、人称代名詞を用いる *a friend of her* はこの場合認められない) にも言える。前者の二重属格は、Tom が友人と認める人を示すのに対し、後者の *of*+ 与格構造は、Tom を友人と認める人を示す。

現代英語を対象とする文法家の間でも、二重属格を「部分」とする説と「同格」とする説とで分かれる。

Quirk et al. (1972:601f) は、*a friend of John's* の *John's* は *John's friends* の代用形 (pro-form) と見る (*a short story of Ann's* が *a short story of Ann's short stories* から派生したと考えるのも同様) ことも可能だという。

しかし、*of* を "out of" や "from among" の意味ととれない例 (例えば、*that nose*

of his) は、前章でも指摘されているように、現代英語においても数多く見出される。

こうしたことから、Altenberg は、Jespersen(1926) が提唱した、二重属格を同格 (appositive) 構文として把握する考えが最も適切だとする。つまり、*a friend of John's* は *a friend who is John's (friend)* と同義となる。また、二重属格と部分名詞句構文は構造が似ているために時として部分属格を示すことがあるだけなのだという。

ただし、ここで、Altenberg が指摘する、二重属格構造と、*some of my friends* や *one of his books* といった部分名詞句構文 (partitive construction) との共通点に注目してみたい。部分名詞句構文は、"non-definite NP + of + definite NP" を含む。つまり、*some, one, each, all* といった数量詞は *some of the men, one of the men* 等の名詞句構文で用いられても、*of* のあとに不定名詞を用いる構文 \**some of men, \*one of men* では用いられない。*Of* の後につく名詞 (二重属格の場合は属格名詞、部分名詞句構文の場合は与格名詞) が「定」であることは共通している。この二重属格の特徴は Zandvoort (1975:105)

(彼は後置属格 (post genitive) と呼ぶ) も気付いている。彼は、二重属格の属格名詞は、特定の個別の人間を示す名詞に限ると言う。(Zandvoort は、もう一点、二重属格の特徴として、主要語 (headword) は冠詞 (通例不定冠詞、*the picture of Turner's that I like best* のように更に特定される場合は定冠詞)、数詞や代名詞を伴ったり、または修飾語を伴わないで複数形で用いられることを述べている。)

以上、現代英語における二重属格構造の統語的・意味的特徴に対する議論を見てきたが、Altenberg があげる二重属格に関する制約が最もそれらを簡潔にまとめていると思われるので、ここに引用したいと思う。二重属格構造を主要部 (前置する名詞) と修飾部 (*of* + 属格) とに彼は分けている。

(a) 主要部は、不定でなければならない。(ただし、制限的修飾 (restrictive modification) を伴う場合を除く。

E.g. *the friend of John's that you met yesterday*)

(b) 修飾部 (Mod) は、定 (definite) でなければならない。

(c) 修飾部と主要部とは、主格関係にななければならない。

以上3点である。

### 3. 「アーサー王の死」における二重属格の使用状況

まず、「アーサー王の死」における二重属格構文が属格名詞を含む場合と所有代名詞を含む場合とを分けてみたいと思う。その上で、主要部の名詞と属格名詞 (または所有代名詞) につく冠詞等で各々が「不定」であるか「定」であるかを検討する。そして、Altenberg らが指摘する現代英語における二重属格の制約がどれほど15世紀英語に適用されるかを調べてみたい。

テキストとして用いたのは、Vinaver (1967)版「アーサー王の死」の第2版であり、用例をさがすにはKato (1974)を利用した。

まず、所有代名詞を含む二重属格構文の例を見てみたい。

主要語に「不定」冠詞がつく例が最も多く20例ある。Nakashima (1981)は、*of one's own*を含む例をあげているが、ここでは除外するのが適当であると考える。

- a lord of yours* (1, 3, 10, 36)
- a knyght of youres* (1, 25, 53, 17)
- a knyght of myne* (4, 12, 147, 32)
- a fellow of myne* (6, 7, 265, 14)
- a felowe of hys* (16, 15, 971, 9)
- an olde felowe of myne* (6, 11, 274, 20)
- a man of his* (10, 82, 769, 5)
- a mayden of myne* (12, 5, 825, 4)
- a cosyn of thers* (8, 20, 404, 31)
- a cosyn of hers* (17, 8, 997, 35)
- a grete foo of owres* (7, 23, 337, 8)
- a frende of myne* (10, 2, 563, 33)
- a corroure of hers* (9, 4, 465, 30)
- an hermytage of myne* (7, 14, 318, 10)
- a rynge of myne* (7, 28, 345, 15)
- an harpe of hys* (9, 18, 496, 4)
- a tokyn of hers* (18, 9, 1068, 5), (18, 9, 1068, 12)
- a tokyn of youres* (18, 9, 1068, 14)
- a rede sleve of myne* (18, 9, 1068, 17)

さらに、複数形で冠詞を伴わない例を追加する。

- felowys of myne* (16, 1, 941, 13)

数詞や、「不定指示形容詞」である *some* や *any*を伴ったものを下に引用する。

- two knyghtes of myne* (2, 14, 82, 29)
- three knyghtes of youres* (6, 6, 262, 3)
- no knyght of youres* (4, 16, 157, 27)
- so many knyghtes of myne* (10, 69, 735, 6)
- two bretherne of myne* (6, 7, 265, 19)
- ony brother of yourys* (10, 60, 703, 4)
- two sunnes of youres* (20, 7, 1175, 32)
- two stronge castels of his* (1, 1, 7, 37)
- som castell off youres* (12, 5, 826, 8)

次に、Nakashima では、指示代名詞 *that* をともなった例として上げられている文を見たい。

..., but here I promyse the my trouth, I woll never com agaynst the more,  
for I promyse the that *swerde of thyne shall never com on my helme.*  
(9, 30, 524, 6)

この場合、*that* は従属接続詞であるとする方が適切であると考える。Lumiansky (1982: 319) の訳をを引用すると、彼も、*that* を従属接続詞として解釈し、*that swerde of thyne* として、特定の「剣」と見る Nakashima の解釈とは違っている。

But here I promise thee on my troth that I will never come against thee  
any more, for I promise thee that no sword of thine shall ever come on my  
helmet.

以上、「不定」を示す二重属格構造の例は、31あるが、それに対して、定冠詞等を伴い「定」を示す例は1つしかない。

*the forehed of hys* (14, 9, 918, 31)

次いで、属格名詞を含む二重属格構文の例を検討する。マロリーの「アーサー王の死」における二重属格構文に現れる主要語は、物語の性質もあるのであろうが、王の臣下、「騎士」('knight') を用いる例が圧倒的に多数を占めている。

まず、「不定」を示す属格名詞を含む二重属格構造の例を見てみよう。

*a knyght of knyge Arthurs* (2, 10, 77, 4) (4, 25, 173, 24) (4, 27, 177, 13)  
(7, 32, 352, 34) (7, 32, 353, 2) (8, 38, 441, 25) (8, 38, 442, 25) (8, 38,  
42, 29) (9, 22, 503, 9) (10, 56, 694, 12) (10, 62, 715, 23) (10, 63, 716,  
19) (10, 63, 716, 29) (13, 16, 891, 22) の 14 例。

*a knyghte of the dukes* (1, 2, 9, 10) (1, 2, 9, 11) の 2 例。

*a knyght of the kynges* (9, 1, 459, 6)

*a knyght of knyge Marsyls* (10, 44, 659, 4)

*knyght of knyge Arthurs* (8, 37, 441, 12)

*no knyght of knyge Arthurs* (10, 13, 589, 31)

*(two, ten good) knyghtes of knyge Arthurs* (8, 19, 403, 34) (9, 9, 476, 24)  
(9, 31, 525, 11) (10, 28, 620, 23) の 4 例。

*four knyghtes of kinge Markes* (10, 35, 637, 35)

*a warde of sir Gawaynes* (5, 11, 239, 13)

*a varlet of knyge Markis* (10, 13, 590, 32)

*a man of knyge Evelakes* (13, 10, 880, 9)

*messyngers of Arthurs* (1, 10, 21, 27)

*londis of knyge Arthurs* (10, 52, 682, 8)

*an holde of Arthurs* (1, 12, 26, 23)



以上、「不定」を示す例は31例ある。これに対して、「定冠詞」の例は少ないが、6例ある。

..., hit is mervayle that he enduryth so longe, that none of *the noble knyghtes of my lorde Arthurs* have nat dalte with hym. (7, 15, 320, 23)  
*all the knyghtes of knyge Arthurs* (8, 37, 441, 10) (13, 16, 891, 8)  
*the (thre) knyghtes of knyge Arthurs* (6, 6, 262, 20) (6, 7, 262, 33)  
*the twenty knyghtes of sir Launcelottes* (9, 31, 526, 14)

#### 4. 二重属格に関する制約

これまで、トマス・マロリー「アーサー王の死」における二重属格構造の例を見てきた。最後に、現代英語における二重属格に関する制約がどれくらいこの15世紀の文献の用例で当てはまるか検討してみたい。

まず、「(a) 主要部は、不定でなければならない。」については、大部分は「不定」であったが、「定」の例も現代英語同様、数は少ないが見られる。この制約は、現代英語においても、中英語においても、絶対的なものとはいえないだろう。

また、「(b) 修飾部 (Mod) は、定 (definite) でなければならない。」には、上にあげた用例を検討すると、全てについて当てはまることが分かる。属格名詞の場合、固有名詞以外では、*the dukes*と*the kynges*、どちらの用例の普通名詞も定冠詞と共に用いられている。例外は一つもなく、この制約はかなり守られている。

最後は、「(c) 修飾部と主要部とは、主格関係にななければならない。」である。修飾部である属格名詞 (または代名詞) は、用例全てにおいて人間を示していた。つまり、有生 (animate) 名詞であった。そして、その属格名詞は常に所有主 (possessor) である。主要部の名詞が有生名詞 (人を示す) である場合は、血縁・主従関係を表す単語であることが多かった。また、主要部の名詞が無生名詞 (ものを示す) 場合は全て所属物・所有されるものを表している。

このように、二重属格の用法は、15世紀後半においては、かなり現代英語に近いと言えると思う。今回は、二重属格構造の用例のみを拾い出して検討したが、*of*+与格構造、前置属格名詞、部分名詞句構文等、二重属格構造と意味的・機能的に重なり合う面を持った他の構造と中英語の文献における比較が今後の課題となると考える。

- Altenberg, B. 1982. *The Genitive v. the of-Construction. A Study of Syntactic Variation in 17th Century English.* Lund Studies in English 62. Lund: CWK Gleerup.
- Curme, G. O. 1931. *Syntax.* Boston: Heath. pp.75-77.
- van der Gaaf, W. 1926. "A Friend of Mine." *Neophilologus* 13, 18-31.
- Hatcher, A. G. 1950. "The English Construction *a friend of mine.*" *Word* 6, 1-25.
- Heltveit, T. 1969. "The Old English Appositional Construction Exemplified by *sume his geferan*: a Forerunner of the Modern Construction *a friend of mine?*" *English Studies* 50, 227-35.
- Jespersen, O. 1927. *Modern English Grammar.* III. London: Allen & Urwin.
- Jespersen, O. 1938. *Growth and Structure of the English Language.* Oxford: Blackwell.
- Jorgensen, E. 1984. "'OF+personal pronoun' used as possessive and subjective genitives about persons." *English Studies* 65, 52-58.
- Kato, T. 1974. *A Condordance to the Works of Sir Thomas Malory.* Tokyo: Tokyo University Press.
- Kellner, L. 1890. "Introduction."Caxton's *Blanchardyn and Eglantine.* EETSES 58.
- Lumiansky, R. M. 1982. *Le Morte Darthur.* New York: Charles Scribner's Sons.
- Mätzner, E. 1860-5. *An English Grammar.* tr. by C. J. Grece. 1874. 3 vols. Tokyo: Senjo.
- McCawley, J. D. 1988. *The Syntactic Phenomena of English.* 2 vols. Chicago: The University of Chicago Press.
- Nakashima, K. 1981. *Studies in the Language of Sir Thomas Malory.* Tokyo: Nan'un do.
- Quirk et al. 1972. *A Grammar of Contemporary English.* London: Longman.
- Quirk et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language.* London: Longman.
- Vinaver, E. 1967. *The Works of Sir Thomas Malory.* 3vols. 2nd ed. London: Oxford University Press.
- Zandvoort, R. W. & van Ek, J. A. 1975. *A Handbook of English Grammar.* 7th ed. London: Longman.

- 石橋他編 1973. 「現代英語学辞典」 東京：成美堂。
- 小野茂著 1980. 「英語学大系 第8卷 英語史Ⅰ」 東京：大修館。
- 大塚、中島監修 1982. 「新英語学辞典」 東京：研究社。
- 田中編 1988. 「現代言語学辞典」 東京：成美堂。
- 中尾俊夫著 1972. 「英語学大系 第9卷 英語史Ⅱ」 東京：大修館。
- 松浪、池上、今井編 1983. 「大修館英語学事典」 東京：大修館。